

遠見山古墳出土の埴輪について

1 総社古墳群と遠見山古墳

総社古墳群は、利根川西岸、前橋市西北部に位置し、榛名山東南麓の末端緩斜面地に立地する。後述する遠見山古墳をはじめとして、古墳時代6世紀後期前半の初期の狭長な横穴式石室を持つ全長 75mの前方後円墳である玉山古墳、6世紀後半のタイプの異なる2つの横穴式石室を持つ全長 90m級の前方後円墳である総社二子山古墳、そして7世紀中葉から8世紀初頭の終末期の大型方墳である愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳を含む古墳群である。昭和 10 年調査による上毛古墳総覧には 15 基の古墳が上げられている。現存する古墳は6基のみである。(図3)

特に、愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳と続く大型方墳は、7世紀の古墳としては、上野地域最大級であり、家型石棺や巨石使用の大型横穴石室、截石切組型石室に白色漆喰を塗布し家型石棺を置くなどその内容は特筆され、畿内中央の有力豪族の墓にも匹敵する内容をもった古墳であるといえる。

この総社古墳群における方墳群の成立や山王廃寺の造営はこの総社の地が、やがて国府が置かれる古代上野地域における最重要地域として位置づけられていく背景の一つとなっているとも言えよう。

遠見山古墳は、前橋市総社町総社甲 1410 番地他に所在する。現存長 60m程の前方後円墳である。(図4) これまで、開発に伴う試掘調査が、平成3年8月30日(城川Ⅰ遺跡) 1405番地、平成4年1月27日から同1月30日(城川Ⅱ遺跡) 1408番地、(平成3年度 市内遺跡発掘調査報告書) 平成6年8月3日、(平成6年度 市内遺跡発掘調査報告書) 1373番地と3回にわたって実施されている。いずれも、市内遺跡発掘調査報告書に概要がふれられている。平成3年度の市内遺跡発掘調査報告書では、出土埴輪についても紹介されている。しかしながら、残念なことに、その遺物については所在が不明となっている。

平成17年、総社町総社在住の志塚昭氏より、埴輪等の寄贈を受けた。出土した場所については、遠見山古墳の南東に隣接している土地で、遠見山古墳の周堀が想定されている地内である。いずれも、耕作中の出土ということで、出土位置を特定することはできないが、総社古墳群中最古に位置づけられる可能性がある遠見山古墳出土の遺物ということで、注目し、ここに報告することとした。また、合わせて、これまで、群馬大学や前橋市教育委員会で行われてきた総社古墳群中の過去の調査成果について、これまで公表されてきた資料を含め取り纏め総社古墳群の再確認、前橋市域における歴史的な位置づけを行っておくこととしたい。

前橋市による総社古墳群の調査一覧

古墳名	調査年月日	調査概要	収録文献等	報告者
総社二子山古墳	平成5年8月12日	周堀の一部調査	(平成5年度市内遺跡発掘調査報告書)	前橋市教育委員会
愛宕山古墳	平成7年9月8日から平成8年3月25日	中学校新築に係る調査	「総社愛宕山遺跡」1996	前橋市埋蔵文化財調査団
蛇穴山古墳	昭和50年8月1日から8月16日	環境整備事業に必要な基礎資料作成のための調査。	「史跡 蛇穴山古墳調査概報」1976	前橋市教育委員会
宝塔山古墳	昭和43年3月4日から3月14日	前庭部調査の概要		
		宝塔山古墳石垣修理に係る発掘調査。		
	平成10年10月15日から平成11年3月5日	下水道調査時の記録。		
遠見山古墳	平成3年8月30日	(城川Ⅰ遺跡)1405番地	(平成3年度 市内遺跡発掘調査報告書)	前橋市教育委員会
	平成4年1月27日から1月30日	(城川Ⅱ遺跡)1408番地		
	平成6年8月3日	1373番地	(平成6年度市内遺跡発掘調査報告書)	前橋市教育委員会
玉山古墳	昭和49年5月15日から7月27日		(文化財報告書第5集) 1975	前橋市教育委員会
	平成6年8月19日		(平成6年度 市内遺跡発掘調査報告書)	前橋市教育委員会

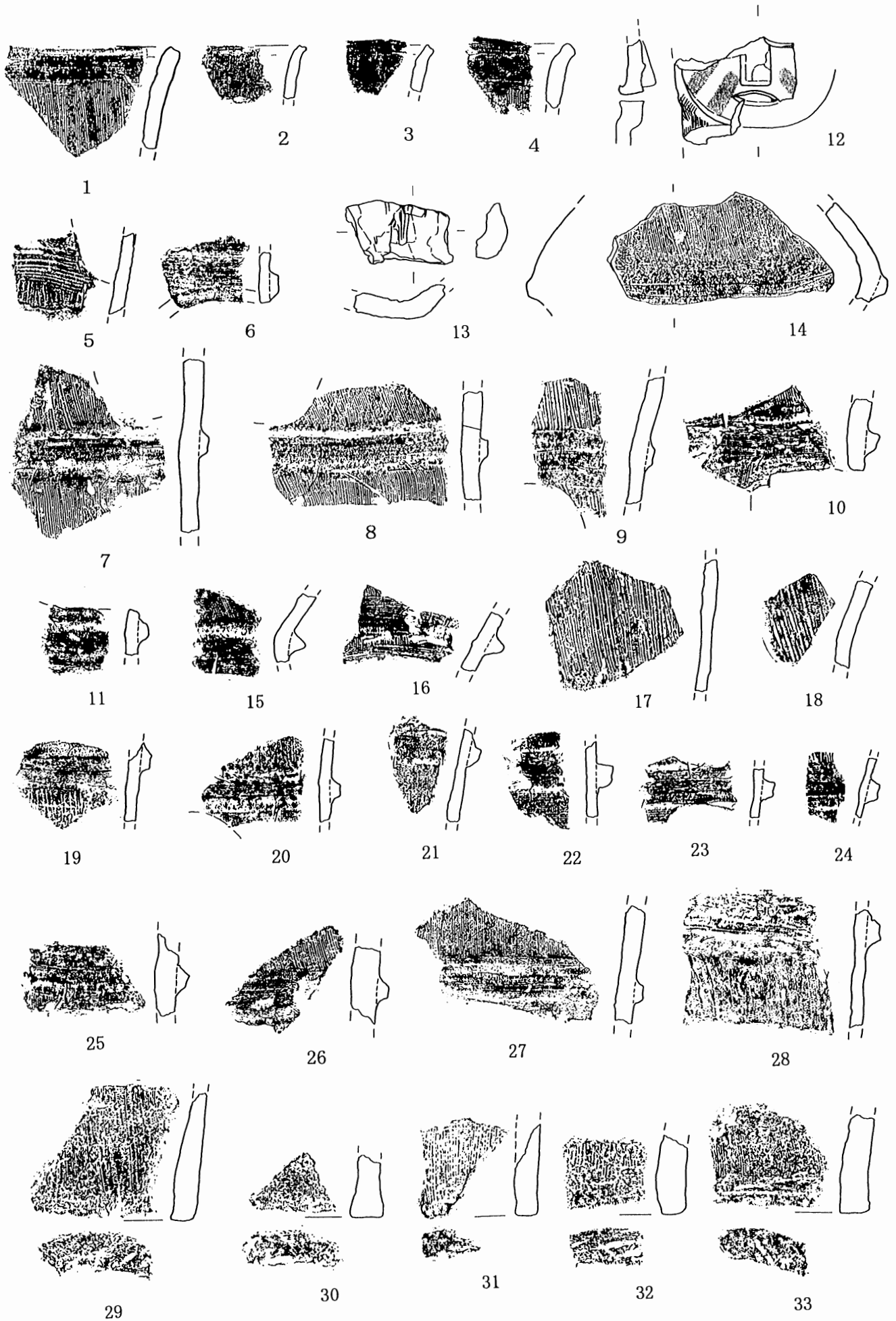
2 寄贈遺物について (図1)

寄贈された遺物の総量は237点である。内、形象埴輪と考えられる破片は、3点、円筒埴輪の破片と考えられるものは、234点であった。

12は人物埴輪の顔面部破片である。2点が接合する。左眼孔部及び左口唇から下顎部の一部が残る。下顎部には鼻から顎に向けて斜め下方に赤色塗彩による2本の線による刺青の表現が残る。胎土は良く精選されている。13は12とは別個体であるが、人物埴輪の左上腕部の一部と思われる。12に比べ造りは粗雑で、胎土には夾雑物を多く含む。14は人物埴輪の裳裾部下端の一部と考えられる。胎土は精選されている。全面にハケ調整が施され

る。12～14は、いずれも人物埴輪の一部であり、推定される全身像高は小ぶり、赤色塗彩や白色の胎土の使用など県内の初期人物埴輪の特徴を良く備えている。

円筒埴輪は、赤色塗彩されたもの(2, 4, 18)やB種横ハケを持つ円筒埴輪(5, 22, 23)が認められる。また、方形あるいは矩形と考えられる透かし孔を持つ円筒埴輪(5, 6, 10)も認められる。タガの断面形状は、はっきりとして高く、断面形が台形状を成すもの(22, 23, 24)が多く認められる。



3 平成3年度調査資料再録 (図2)

平成3年度市内遺跡発掘調査報告書に収録された埴輪について、再録しておく。「検出された埴輪は全て円筒埴輪片であるが、大別すると二種類に分けられる。赤色塗彩がみられるものは、2, 4, 9, 10, 13, 15, 25, 38, 39である。これらは焼成良好で褐色を呈す。塗彩は確認できないが同じ焼成のものに、1, 3, 5, 11, 12, 14, 16, 36, 41, 43がある。

この焼成のものは多くが突帯の断面形が平坦な台形を呈するものも多く、他は方形の断面を呈するものも多くみられる。前者のうちには突帯の上面が窪んでいるものも含まれており (3, 12, 14, 41)、さらに細かい分類が可能である。また、すかし孔が確認できるものは25, 26, 37, 43の4点であるが、25と他では孔の加工が異なり、25は内径が狭くえがられている。25は前者の一群に含まれる。」

図2 (23, 42) にはB種横ハケが認められる。

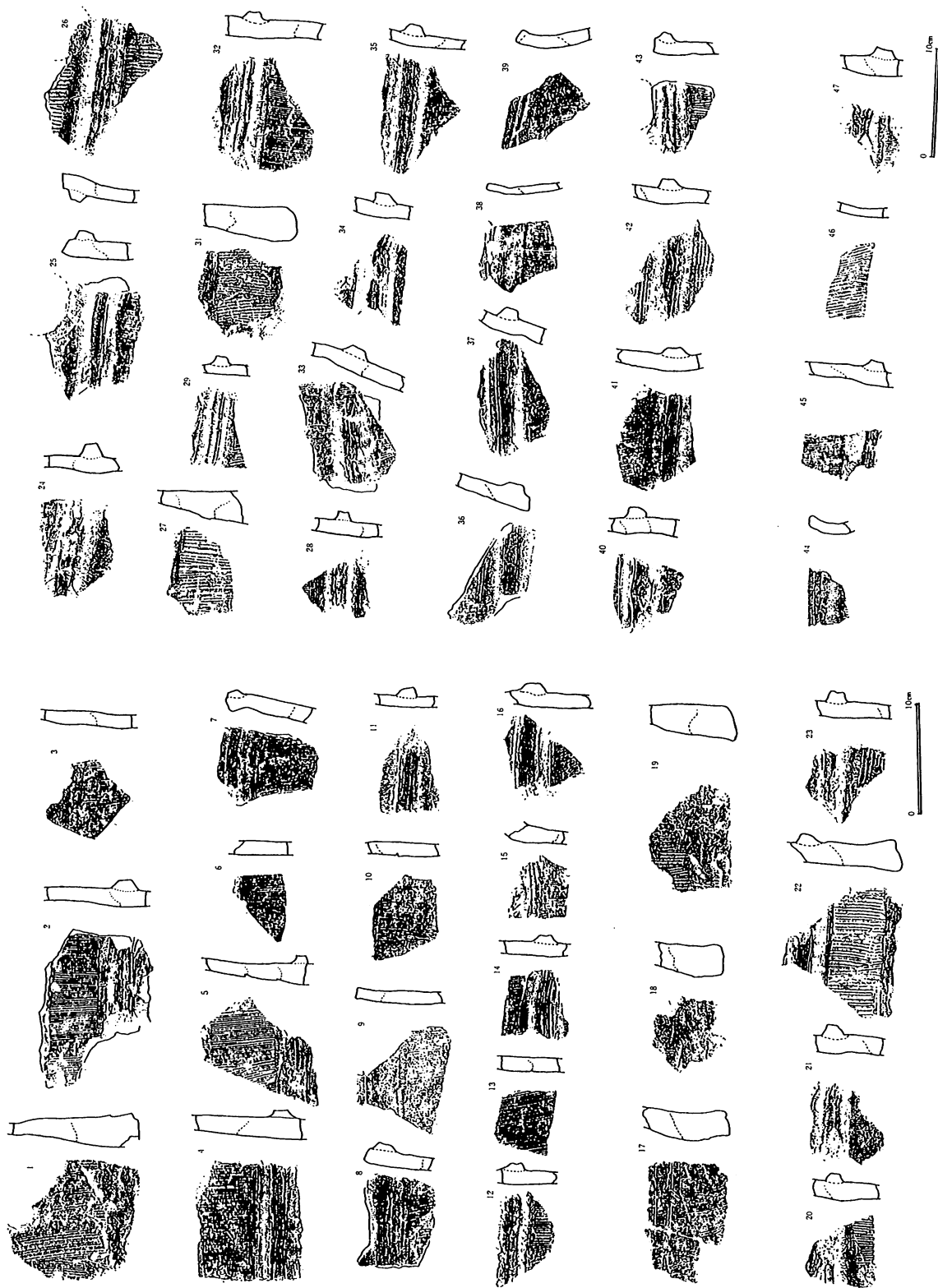


図2 平成3年度調査資料

4 遠見山古墳の時期

遠見山古墳は、これまでの3回行われた試掘調査によって、推定全長102m、後円部径52m、前方部の最大幅62m、周堀の上幅10m前後が推定される大型前方後円墳であることが確認されている。平成3年度の試掘調査では、周堀の一部を基底部まで掘り下げている。その際、基底部より約3cm上にHr-FAの純層を検出している。

(図5)

出土埴輪の特徴からは、5世紀後半から6世紀前半の時期が想定される。また、平成3年度の調査資料からは、周堀内にHr-FAの純層が検出されている。以上のことより、遠見山古墳の築造時期は、これまでの想定年代5世紀後半を大きく遡ることは無く、採集された人物埴輪

に認められる特徴は、群馬県における出現期の人物埴輪の特徴を良く残す。また、円筒埴輪については、B種横ハケを残す点、赤色塗彩される点など、いずれも、中期後半から6世紀前半の特徴を示している。

これらの出土遺物の特徴からもその年代観は支持できる。すなわち、これまでのところ、遠見山古墳は、総社古墳群中最も古い古墳であるといえる。

総社古墳群は、遠見山古墳で始まり、王山古墳—総社二子山古墳（後円石室）—（前方部石室）—☆—愛宕山古墳—宝塔山古墳—蛇穴山古墳という系譜となる。特に7世紀前半の中断時期を挟んで作られる方墳群は、古墳時代の悼尾を飾るとともに、まさに古墳時代から律令期にかけての上野地域最大の豪族の存在が考えられる。

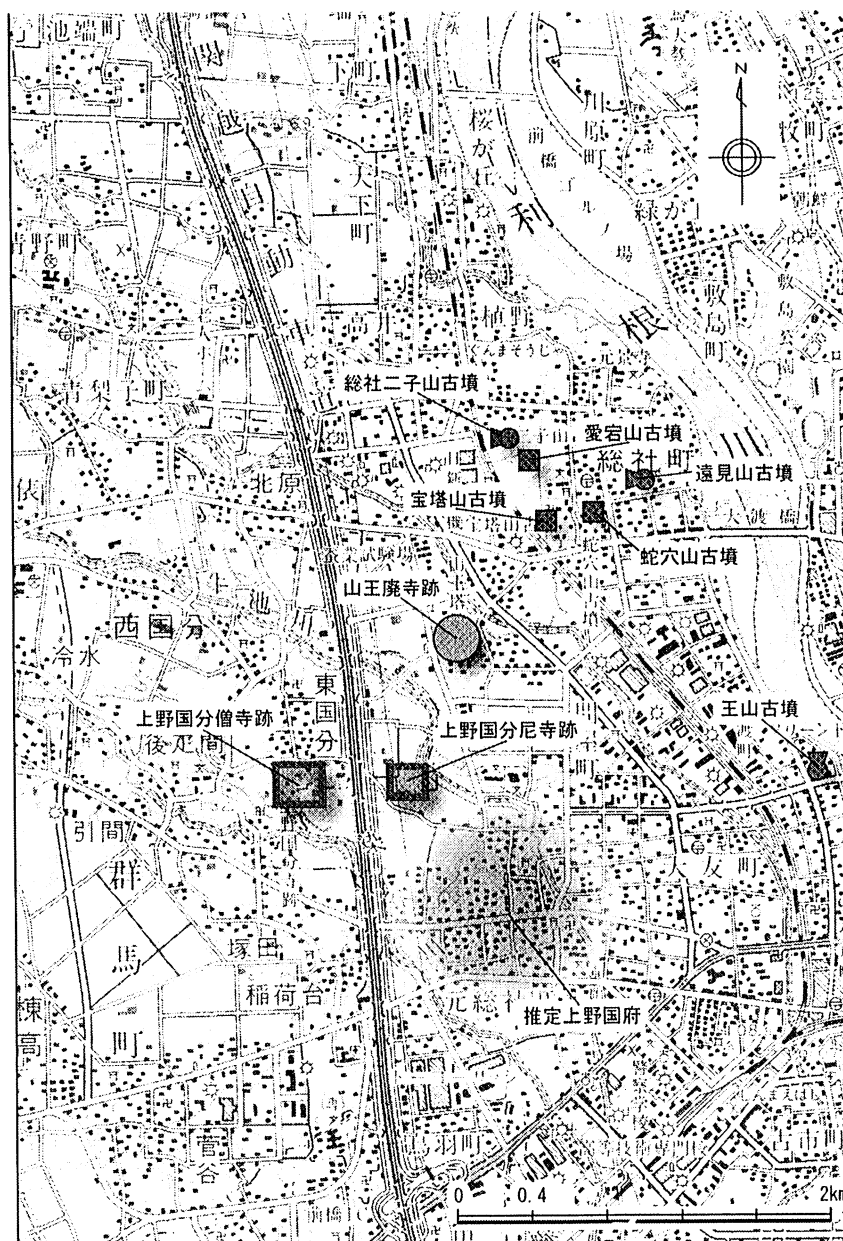


図3 総社のおもな遺跡と遠見山古墳

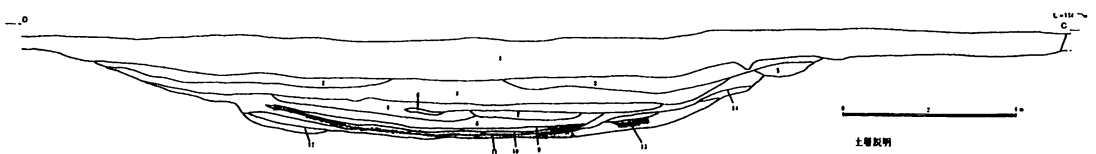
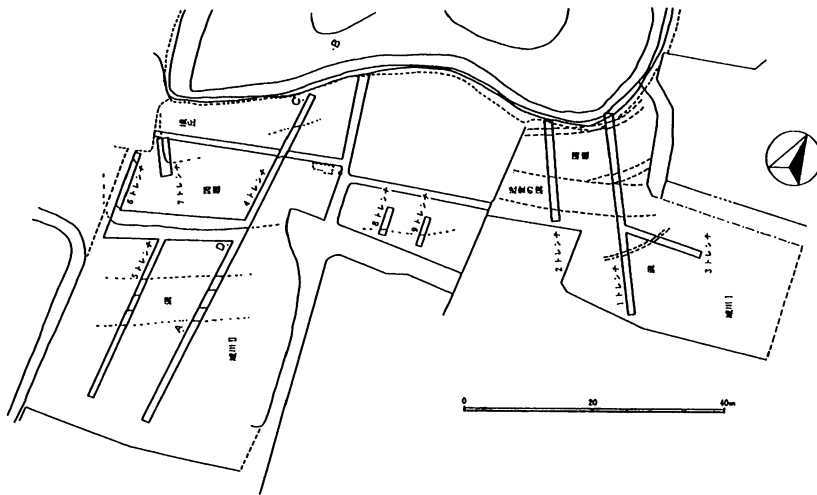
5 終わりにかえて

総社古墳群の発掘調査については、昭和43年の宝塔山古墳の前庭部の調査から始まる。その後、前橋市教育委員会による王山古墳の調査や数次にわたる小規模な試掘調査、学校新築工事に際しての発掘調査などを経ている。それぞれ、概報や年報等に報告がされているが、これら

を前橋市として総合的にまとめたものが無く、今回の報告は、それらの既出報告を再録することを企画したものであったが、既に40年近い年月がたっており資料の抽出に困難を要している。その為、今回は既に、5世紀の古墳として定着しつつある遠見山古墳について、再度、採集資料を通して、その時期的位置づけを再確認したにとどまった。



図4 遠見山古墳平面図



- 土層説明
1. 墳頂部埋土層
 2. 墳頂部埋土層 小規模な、埋り込み
 3. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部
 4. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部
 5. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部
 6. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部
 7. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部
 8. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部
 9. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部
 10. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部
 11. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部
 12. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部
 13. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部
 14. 墳頂部埋土層 埋り込み、墳頂部

図5 遠見山古墳周堀内の土層断面